

国立国語研究所学術情報リポジトリ

日本語特殊形容詞の装定用法の出現傾向について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-03-20 キーワード (Ja): キーワード (En): Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese (BCCWJ) 作成者: 王, 海濤, WANG, Haitao メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001500

日本語特殊形容詞の装定用法の出現傾向について

王 海涛（京都大学大学院人間・環境学研究科）¹

Trends in the usage of Japanese Adnominals

Wang Haitao (Graduate School of Human and Environmental Studies, Kyoto University)

要旨

本研究は、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を対象にして、日本語の特殊形容詞（「多い、少ない、遠い、近い」）の連体修飾（装定用法）の使用実態と修飾構造ごとの特徴について考察したものである。形容詞は名詞を修飾する際、「連体形＋名詞」の形をとるが、特殊形容詞は、一般に「連用形＋の＋名詞」の形をとる。これまでに特殊形容詞が連用形によって装定用法を形成する理由について研究が行われてきたが、その使用実態を網羅的に調査・分析した研究は見られない。そこで、本研究では、BCCWJから特殊形容詞の装定用法の用例を抽出し、その用例を修飾構造ごとに分類、それぞれの構造ごとに意味的な特徴の記述を行った。その結果、装定用法の「連用形＋の」と「連体形」の出現傾向には違いがあり、同じ特殊形容詞であっても、助詞のつく修飾構造の分布に偏りが見られた。また、「名詞＋に」が連体形の前にくる装定用法が容認されていることも明らかとなった。

1. はじめに

日本語の形容詞は名詞を修飾する装定用法²を持つとともに、文の述語となる述定用法³を持つ。形容詞「美しい」において、「美しい人」というのが装定用法であり、「人が美しい」というのが述定用法である。一方、形容詞「多い」については、「人が多い」とすることはできるが、「*多い人」とすることはできない。仁田（1977）は、「多い」「少ない」や「遠い」「近い」が通常の形容詞の連体形による装定用法を持たず、「連用形＋の」⁴という形による装定用法を持つと指摘した。また、「少ない」の装定用法は、別系列の副詞に属する「少し」を補充法として使われていると補足説明を添えている。本研究では、これら四つの形容詞「多い、少ない、遠い、近い」を、便宜のため特殊形容詞⁵と称する。特殊形容詞は装定用法の形に制限を受けるが、そのような説明は外国語母語話者向けの日本語教科書には書かれていないために、「*多い人が広場に集まっている」というような誤用が日本語学習者の書く文章によく見られる。したがって、これらの形容詞の振る舞いを記述、説明することは日本語教育の分野においても重要な意味を持つ。

特殊形容詞は、一般の形容詞と同形の連体修飾が容認されることもある。たとえば、「しらがの多い女の人が歩いて来た（仁田 1977 : 59）」というような文では、「しらがの多い」が全体で連体修飾として「女の人」を修飾する。このように特別な修飾構造によって、特殊

¹ wang.haitao.36s_at_kyoto-u.jp [replace_at_by@]

² 仁田（1977 : 56）によると、装定用法とは、連体修飾語（規定語）として機能する用法のことである。また、佐久間（1958 : 44-46）は、構文をもって、「装定」と「述定」の転換を論じる際、最初に連体用法を「装定」、述語としての用法を「述定」に概念として提案した。

³ 仁田（1977 : 56）によると、述定用法とは、述語として働く用法のことである。

⁴ この「連用形＋の」という装定用法について、山田（1908 : 875-876）は「日本文法論」において「用言の連用形に「の」を加えて連体語になるのである」と述べている。

⁵ 本研究の特殊形容詞は、述定用法としての用法には制限がないが、装定用法に制限を受ける点で特殊な形容詞と言える。梁（2010 : 60）では「多い、少ない、遠い、近い」を特殊形容詞と称している。

形容詞であっても連体形による装定用法が容認される現象が見られることは、他の先行研究でも指摘されている。そこで本研究では、『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』を対象にして、日本語の特殊形容詞である「多い、少ない、遠い、近い」の装定用法の使用実態について調査し、それぞれの装定用法が可能となる構造の特徴について考察する。

2. 先行研究

特殊形容詞の装定用法に制限がある理由については、多くの研究が行われている。仁田 (1977: 62) は、「*庭に多い人が居る」という文が非文であると指摘しており、「多い」「少ない」や「遠い」「近い」が通常の意味において装定化するとき、これらの規定語は、自らの有する意味論的な特徴によって、主要語である名詞が内在的に持っている性質、属性の一つでもって、主要語を限定するタイプの規定語にはなり得ない」と述べている。つまり、これらの形容詞が被修飾名詞の内包している性質、属性を表していないという点が理由であると解釈している。寺村 (1991: 264) も、『多い』『少ない』というのは、ある時、ある所に存在するものの数量について評価する言葉であって、『大きい、古い、洒落ている (洒落た)』のようにその存在するものの (他と比べての) 形状や状態や性質を述べる言葉ではない」と述べ、被修飾名詞の属性が修飾制限の要因であると主張している。上記の先行研究は、特殊形容詞が被修飾名詞の性質または属性を修飾していないために装定用法が成り立たないと解釈している。今井 (2012) は、仁田 (1977) と寺村 (1991) の説を「内在的形容説」と呼び、その欠陥を指摘している。その上で、「多い」と「少ない」の二つの形容詞の構文上の特徴について意味的観点から分析し、連体形による装定用法の不自然さは「多い」「少ない」に含まれる「存在」という意味成分に起因することを主張している。

一方で、特殊形容詞であっても通常の連体形による装定用法が可能になる状況もある。寺村 (1991: 264) は、「この辺りで多い事故は車と自転車の接触事故です」という文を挙げ、「同種のものなかで、範囲を限定してその特徴を言う」場合には、形容詞の装定用法の特徴と一致するために、連体形による装定用法が可能になると述べている。寺村はこれを「範囲限定の品定め」と呼んでいる。木下 (2004: 34) は、寺村 (1991) の分析をもとにして、「比較対象の存在の明示は「多い」の場合であれば、範囲限定という形で間接的に、あるいは直接に比較そのものを示すことによって行われる。「遠い」の場合には、距離を構成するふたつの地点が明示されていけばよい」と述べ、「範囲限定の品定め」を「比較対象の明示化」という観点から、より一般的な解釈とした。万 (2011) は木下の説を受け継いで、「多い」「少ない」は物の数を表示する相対形容詞に属するため、文の中で他のものと対比する意味があれば、連体形による装定用法が成立すると指摘した。

このように先行研究では、「多い」あるいは「遠い」を典型的な特殊形容詞として取り上げて分析を行っている。一方で、それぞれ反対の意味を持つ「少ない」「近い」についてはあまり深く触れていない。たとえば、「少ない」に対しては、その特性は「多い」と同じであるという簡単な説明にとどまっている。また、特殊形容詞の装定用法と述定用法の相違点については、修飾制限の観点から考察する研究があるものの、コーパスを対象として、特殊形容詞の具体的な使用状況を考察し、分析する研究はまだ行われていない現状がある。

3. 分析手順

3.1 コーパスからの抽出

本研究は、『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』を使用し、特殊形容詞「多い、

少ない、遠い、近い」の装定用法の使用実態を考察しながら、それぞれの装定形式が可能になる構造の特徴について述べる。具体的には、以下の二段階で行う。まず、『現代日本語書き言葉均衡コーパス（中納言）』を利用して、特殊形容詞の「連用形+の+名詞」⁶と「連体形+名詞」⁷という二つの装定形式の使用実態について調査する。次に、「連体形+名詞」で抽出した装定用法について、その装定用法の前に置かれる部分の用例を、「名詞+助詞+連体形+名詞」と「 ϕ +連体形+名詞」、「その他」の三種類に分類し、それぞれの修飾構造の特徴について考察する。

3.2 抽出結果

先述した抽出対象のうち、はじめに最初の段階での抽出結果について述べる。中納言の「短単位検索」を用いて、特殊形容詞の装定用法を検索した結果を表1に示す。

表1 「連用形+の+名詞」と「連体形+名詞」の比較

特殊形容詞	多い	少ない	遠い	近い
連用形+の+名詞	15,658 ⁹	696	440	3,261
連体形+名詞	7,332 ¹⁰	3,793	1,869	6,219
合計	22,990	4,489	2,309	9,480

ここから、「連体形+名詞」という装定用法に前置される部分を、「名詞+助詞+連体形+名詞」、「 ϕ +連体形+名詞」、「その他」の三種類に分類した。分類の結果を表2に示す。

表2 「連体形+名詞」の前置部分による分類

特殊形容詞	多い	少ない	遠い	近い
名詞+助詞+連体形+名詞	5,906	2,301	201	3,899
ϕ +連体形+名詞	508	636	1,410	962
その他	918	856	258	1,358
合計	7,332	3,793	1,869	6,219

⁶ 検索方法に関して、「多い」を例として、検索条件式を以下に示す。「連用形+の+名詞」=キー: 書字形出現形="多く" AND 後方共起: 書字形出現形="の" ON 1 WORDS FROM キー AND 後方共起: 品詞 LIKE "名詞%" ON 2 WORDS FROM キー WITH OPTIONS tglKugiri="|" AND tglBunKugiri="#" AND limitToSelfSentence="1" AND tglFixVariable="2" AND tglWords="20" AND unit="1" AND encoding="UTF-8" AND endOfLine="CR"

⁷ 検索方法に関して、「多い」を例として、検索条件式を以下に示す。「連体形+名詞」=キー: 書字形出現形="多い" AND 後方共起: 品詞 LIKE "名詞%" ON 1 WORDS FROM キー WITH OPTIONS tglKugiri="|" AND tglBunKugiri="#" AND limitToSelfSentence="1" AND tglFixVariable="2" AND tglWords="20" AND unit="1" AND encoding="UTF-8" AND endOfLine="CR"

⁸ 「 ϕ 」は何も存在しないことを表す。

⁹ 日本語の表記法により、「多くの」は「多くの」「おおくの」「オオクの」「多くの」「多くノ」「おおくノ」「オオクノ」「多クノ」という八つの表記があり、それぞれの表記ごとに検索が必要である。他の特殊形容詞についても同じ検索を行った。

¹⁰ 「多い」は「多い」「おおい」「オオイ」「多イ」という4つの表記法があるので、それぞれの形による検索プロセスが必要である。他の特殊形容詞も同じ検索プロセスを行う。

4. 分析と考察

4.1 特殊形容詞の二つの装定形式の比較

表1に示したように、同じ特殊形容詞であっても、その使用実態はだいぶ異なっている。使用頻度について見ると、「多い」の装定用法は22,990例ともっとも多い。それに対し、「遠い」の装定用法は2,309例であり、もっとも少ない。ただし、これは元の形容詞の使用頻度に依存するため、単純な比較はできない。

二つの装定形式に関して見てみると、「多い」の場合、「多く+の+名詞」という装定形式は15,658例で、「多い+名詞」という装定形式が7,332例であることから、「多く+の+名詞」の方が常用される装定形式であると考えられる。それに対し、「少ない」の場合は、「少ない+名詞」という装定形式が3,793例である一方、「少し+の+名詞」は696例となっており、「少ない+名詞」の方が常用されているものと考えられる。したがって、単純に「少ない」は「多い」の反対である、と述べることはできないことが分かる。

また、「遠い」と「近い」についても、「連体形+名詞」という装定形式は、それぞれ1,869例と6,219例であり、「連用形+の+名詞」がそれぞれ440例と3,261例であることから、「連体形+名詞」の方がより常用されていると考えられる。

以上、コーパスからの検索結果を見る限り、「多い」の装定用法については、「連用形+の+名詞」という特殊な形式の方が一般的であることが明らかとなった。一方で、「少ない」「遠い」「近い」については、特殊形容詞ではあるが、一般の形容詞と同じ「連体形+名詞」という形の装定用法がより一般的に使用されている傾向が見られた。

4.2 「連体形+名詞」の前置部分の分析

次に、「連体形+名詞」の前置部分に焦点を当てて分析を行う。「連体形+名詞」の前置部分について、とくに「名詞+助詞」が置かれる場合について検討する。表2より、「多い」と「少ない」、「近い」の三つについては、「名詞+助詞+連体形+名詞」という修飾構造を持つ方が顕著である。連体形に前置される部分の助詞について、次の「で」「が」「の」「に」と「その他」の五種類に分類し、それぞれの出現頻度を集計した。その結果を表3に示す。

表3 「連体形+名詞」の前置部分の助詞の分類

特殊形容詞	多い	少ない	遠い	近い
で	24	9	2	3
が	2,978	1,059	25	128
の	2,199	1,002	38	65
に	238	12	11	3,569
その他	467	219	125	134
合計	5,906	2,301	201	3,899

表3から分かるように、「多い」と「少ない」では、助詞「が」と「の」を含む例がもっとも多く、それぞれ合計で5,177例と2,061例であり、全体の8割以上を占める。それに対し、「近い」では、助詞「に」を含む修飾構造の出現頻度がもっとも高く、3,569例と約9割以上を占める。

実際の用例について見てみる。まず、「多い」と「少ない」において「が」と「の」を含

む例を以下に示す。

- (1) 夏場は熱中症が多い季節です。(『広報くるめ』)
- (2) 人通りの少ない道路には、街灯が付き始めていた。(『チェーンレター』)

例(1)と(2)は同じ構造を持つ。例(1)において、数量の多寡が問題になっているのは、被修飾名詞の「季節」ではなく、連体修飾節の中の名詞「熱中症」である。その上で、「熱中症が多い」という連体修飾節が「季節」を修飾している。例(2)も、「人通りの少ない」という連体修飾節が全体として「道路」を修飾している。「名詞+(が・の)+(多い・少ない)」という構造については、前置部分全体が連体修飾節として、後ろの「名詞」を修飾しているものがほとんどであった。

次に、「近い」において「に」を含む例を以下に示す。

- (3) 敵味方あわせて五万に近い軍兵がある。(『絵物語・下天は夢か』)

一般に助詞「に」は目的地を示すが、例(3)では、「五万」という数字が目的地ではなく、基準点として示されている。そのため、ここでの「近い」は物理空間的な意味で用いられているのではなく、他の数値と比較した際の数の多少を示す相対形容詞として使用されている。このように「近い」においては、物理的な距離だけでなく、数値的な意味を含めた抽象的な相対的接近性を示す用法が多く見られ、この場合に「に」という助詞が用いられることが多いことが明らかとなった。

4.3 先行研究の再考察

先行研究で示した「多い」の装定用法に関する主張の違いについて検討する。

- (4) *庭に多い人が居る。 仁田(1977: 61)
- (5) この辺りで多い事故は車と自転車の接触事故です。 寺村(1991: 264)

この二つの文に関して、仁田(1977)は例(4)で示すように「多い」の連体形による装定用法が非文法的だと主張しているのに対し、寺村(1991)と木下(2004)は、例(5)のような場合は文法的であると指摘している。まず、『新明解国語辞典』(2017: 1139)で格助詞「に」の解釈に関して、「その事物が存在する場所を表す」という意味項目により、「庭に」も「範囲限定の品定め」という機能を持っている。一方、今回検索した「多い」の装定用法において、「海岸沿いに多い木」「京都に多い苗字」「思春期に多い問題行動」などのように、連用形に助詞「に」が前置される修飾構造を持つ用例は、238例あった。検索結果を見る限り、助詞「に」を含む例文が観察される以上、「名詞+に+多い+名詞」という装定形式は容認されていると言える。

以下、「名詞+に+多い+名詞」に見られる「名詞+に」について、「範囲限定の品定め」という観点から具体例を考察する。

- (6) 子宮内膜症は30代に多い病気です。(『DOMANI』)
- (7) 京都市で多いタクシーは、MKとヤサカでしょうか？(Yahoo!知恵袋)

例(6)と(7)において、「範囲限定の品定め」の観点から見ると、「多い」は「30代に」「京都市で」などの範囲を限定する表現と共起すれば、装定として用いることができる。例(6)では、年齢という尺度において「30代」という範囲に限定している。特殊形容詞は、被修飾名詞の属性(性質/状態)を述べる言葉ではないということで、装定用法に制限があると指摘されたが(仁田 1977; 寺村 1991)、それに対して、助詞「に」や「で」を含む例文では、連体修飾節が一定の選別力を持ち、被修飾名詞と他の名詞とが区別される。そのような時、特殊形容詞は前置部分を含めて、被修飾名詞の属性(性質/状態)を修飾することになる。したがって、一般の形容詞と同じように連体形の装定用法の容認度が高くなる。例(6)では、その「病気」が「30代」という範囲に限定されている。言い換えると、この「病気」は他の年代、20代や40代などよりも「多い」と性質を持っているということである。「30代に多い」という連体修飾節が一定の選別力を持つために、「病気」を修飾することの容認度が高くなる。例(7)も、タクシーについて「京都市」という地域に限定し、「京都市で多い」という連体修飾節が一定の選別力を持つために容認度が高くなったと見るべきであろう。

以上、先行研究で議論のあった「名詞+に+多い+名詞」という装定用法については容認されるべきであるという点、また、助詞「に」についても、「範囲限定の品定め」という説が認められる点を確認した。「範囲限定の品定め」という説においては、助詞「に」や「で」を含む例では、連体修飾節が一定の選別力を持ち、被修飾名詞と他の名詞とを区別する特徴を被修飾名詞が持つことを確認した。

5. おわりに

本研究では、『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』を使用し、特殊形容詞である「多い、少ない、遠い、近い」について、「連用形+の+名詞」と「連体形+名詞」という二つの装定形式の使用実態を調査した。また、「連体形+名詞」の装定用法を対象に、「名詞+助詞+連体形+名詞」における「名詞+助詞」の出現傾向について調査した。最後に、先行研究における「連体形+名詞」の前置部分に「に」が含まれる場合の容認性について、実際の用例を考察することで、「範囲限定の品定め」という説が認められる点を確認した。

以下、本研究において明らかとなった点を簡単にまとめておく。

- ① 「多い」の装定用法では、「連用形+の+名詞」という形が一般的であるのに対し、「少ない」「遠い」「近い」については、「連体形+名詞」という形が一般的に用いられている。
- ② 特殊形容詞の使用傾向を見ると、「連体形+名詞」という装定用法において、「多い」「少ない」では前置部分の述語として用いられる場合が相当な比重を占めている。「近い」では「名詞+に+近い+名詞」という形での出現頻度がもっとも多い。
- ③ 「名詞+に+連体形+名詞」という装定用法は容認される。助詞「に」が前置される場合、「範囲限定の品定め」という説(寺村 1991)で説明される。
- ④ 「範囲限定の品定め」の補足説明として、助詞「に」や「で」を含む例文では、連体修飾節が一定の選別力を持ち、被修飾名詞が他の名詞と区別される。その際、特殊形容詞の連体形の容認度が高くなる。

今後は、「連体形+名詞」の前置部分の分析を深めるとともに、他の一般形容詞と違い、特殊形容詞の装定用法が制限を受ける原因についても考察を進めたい。また、日本語学習者において特殊形容詞が誤用される状況や原因について分析し、特殊形容詞の適切な指導法についての研究に繋げていきたい。

謝 辞

本研究は、著者が華中科技大学大学院で執筆した修士論文での研究を元に再分析を行い、構成しなおしたものである。本研究を進めるにあたり、修士でご指導いただいた指導教員の陳慧玲先生にこの場をお借りして御礼を申し上げます。また、日頃から私の研究指針と研究方法について多大なご指導およびご助言をいただいた鐘勇先生に深く感謝の意を表します。最後に本研究に対し、適切なご指導および本論文のご修正をいただいた現指導教員の金丸敏幸先生にも心より御礼を申し上げます。

文 献

- 今井忍 (2012). 「なぜ「多い学生」「少ない本」と言えないのか—<存在>という意味成分に基づく再検討—」『日本語・日本文化』 38, pp.53-80.
- 大島資生 (2010). 『日本語連体修飾節構造の研究』 ひつじ書房.
- 小木曾智信・中村壮範 (2014). 「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』形態論情報アノテーション支援システム的设计・実装・運用」『自然言語処理』 21:2, pp.301-332.
- 木下りか (2004). 「形容詞の装定用法をめぐる一考察: 「多い」「遠い」の場合」大手前大学人文科学部論集 5号, pp.25-35.
- 工藤真由美 (2007). 『日本語形容詞の文法-標準語研究を越えて』 ひつじ書房.
- 佐久間鼎 (1958). 「修飾の機能」『日本文法講座 5 表現文法』 明治書院.
- 寺村秀夫 (1991). 『日本語のシンタクスと意味 III』 くろしお出版.
- 中川正之 (2009). 「中国語から見た日本語の文法記述—とくに「多い・すくない、遠い・近い」をめぐる」『言語』 38:1, pp.56-63.
- 仁田義雄 (1977). 「形容詞の装定用法—「多イ」をめぐる」『文芸研究』 85:5, pp.55-63.
- 仁田義雄 (1980). 『語彙論的統語論』 明治書院.
- 毕晓燕 (2013). 「小议由「多い/少ない/ない」组成的三个词词组」『首都外语论坛』 00, pp.8-17.
- 前川喜久雄・山崎誠 (2009). 「現代日本語書き言葉均衡コーパス (特集 日本語研究とコーパス) — (コーパスの構築と応用)」『国文学: 解釈と鑑賞』 74:1, pp.15-25.
- 万中英 (2011). 「浅析形容词「多い、少ない」的特殊性」『商业文化』 12, pp.370-371.
- 村田菜穂子 (2005). 『形容詞・形容動詞の語彙論的研究』 和泉書院.
- 森田良行 (1989). 『基礎日本語辞典』 角川書店.
- 山田孝雄 (1908). 『日本文法論』 宝文館.
- 山田忠雄・柴田武・酒井憲二他 (2017). 『新明解国語辞典』 第7版 三省堂.
- 劉洪蕾 (2010). 「日本語における形容詞の連体修飾について」『日语教育与日本学研究』 00, pp.350-353.
- 梁红梅 (2010). 「“多い”“少ない”作定语的表达式及原因分析」宁波大学学报 3号, pp.60-64.

関連 URL

コーパス検索アプリケーション 『中納言』

<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>